

若い頃は、個別懇談が恐ろしかった。個別懇談が楽しくなったのはいつ頃からだろう？それはなぜだろう？若い頃は話すのに必死だった。一方的に話すわりには、うまく伝えられなかったこともある。反省もいっぱいある。いつの頃からかその一方的がなくなった▼前者でも後者でも普遍的な思いはあった。阿下喜小学校でいえば、「自分の力で願いをかなえる子の育成」を目指しているということだ。もう一つは、そのことで「共通理解」と「役割分担」をしたいということ。短い時間設定なので、十分とはいえなかったかもしれないが、「共通理解」と「役割分担」は上手くできたのだろうか▼家庭訪問も含めて「電話でもいいじゃないか」「連絡帳もあるし」「いるのか？」そんな声も聞こえてくる。大事にしていることは、「相手の目を見て話すこと」コロナ禍の時には、それができなかった▼阿下喜小学校は「対面」にこだわる。子どもを真ん中にしておうちの方と担任教師が正対して話をする貴重な機会「共育」と「響育」の場なのだ▼しかしもっと大切にしたいことが実はある。教師側の課題かもしれないし今まで書いてきたことと少し矛盾する。このことに気がつき合えたら、きっと個別懇談は楽しくなるのではないかと思う。教師が保護者を笑顔で迎え、保護者が笑顔で帰れる個別懇談。きっとその先には、子どもの明るい未来があるはずだ。